体育における学習意欲欠如者の抽出およびその治療について（第二報）

天野菊三郎・原田秀雄

Ⅰ 研究目的

昨年度からの継続研究として体育における学習意欲欠如者の問題をとりあげた。この研究の目的についてはすでに昨年度の研究紀要にのべたが，要約すれば学習に積極的に参加し得ない生徒，とくにその中で身体活動そのものに対して意欲を欠く生徒をとりあげ，その生徒の学習意欲の欠けるに至った原因を追求し，それに対しての治療を試みようとするものである。

Ⅱ 研究方法

本年度はじめ，教科部門の保健体育科部門関係の教育学部と附属の教官9名がこの研究の継続について種々討議した。昨年度研究担当者が事情によって代ったため，本年度は更に最初にもどって新たに本校の中学校2年生の女子を研究対象として取り上げ，抽出ならびに治療を行うこととした。なお昨年度抽出の現中学校3年生の女子数名については前の担当者が継続指導をすることとした。

Ⅲ 研究経過の概要

昨年度の抽出の方法から得たいろいろな結果から今年度は更にその抽出の方法を変えてみた。そこで第一学期の終りに，次のような方法で研究対象の抽出をした。

1. 教師の観察
2. 質問紙
3. 課題を与えての作文

Ⅳ 現在までの成果

1. 抽出

（1）教師の観察

毎時の授業時間によく観察し学習の場面にとけ込まない者，学習場面から外へ逃避しようとする数名の女生徒をチェックした。

（2）質問紙

質問紙として次のような調査をした。

調査1

> 運動することは好きですか。嫌いですか。体育の学習ばかりでなく，身体活動すべてについて考えて，自分がどれにあたるか○印でかこみなさい。
>
> 大好き　好き　どちらともいえない　嫌い　大嫌い

この調査は身体活動の嫌いな生徒を抽出するための直接的な質問であって，その結果は表1のようであった。

表1　身体活動の好き嫌い

	大好き	好き	どちらともいえない	嫌い	大嫌い	計
人員	11	23	8	4	0	46
%	23	50	18	9	0	100

この表からわかることは昨年も同様の調査をして大体同じような結果を得たのであるが，この年齢の生徒において，身体活動を嫌いだとはっきりいい切れるものは余程何か問題をもっている生徒であるといえるだろう。そうした点でこの調査で，身体活動を嫌いとしたものを一応チェックした。

調査2

> 次に2つずつ組み合わせてある教科について2つを比較し，自分の好きな教科を○印でかこみなさい。
>
> 国語ー社会　社会ー数学　数学ー理科　理科ー英語
> 英語ー音楽　音楽ー図工　図工ー体育　体育ー家庭
> 国語ー数学　社会ー理科　数学ー英語　理科ー音楽
> 英語ー図工　音楽ー体育　図工ー家庭　家庭ー国語
> 体育ー国語　家庭ー社会　国語ー理科　社会ー英語
> 数学ー音楽　理科ー図工　英語ー体育　音楽ー家庭
> 図工ー国語　体育ー社会　家庭ー数学　国語ー英語
> 社会ー音楽　数学ー図工　理科ー体育　英語ー家庭
> 音楽ー国語　図工ー社会　体育ー数学　家庭ー理科

この調査は生徒達の学習教科である9教科を一対比較させて，体育の学習の好き嫌いを間接的に

表2　一対比較による教科の好き嫌い

教　科	社会	体育	英語	数学	理科	音楽	国語	図工	家庭	(46名)
好きとマークした数	229	211	208	203	203	173	172	159	98	1656

しらべようとしたもので，その結果は次のようであった。

まず体育を生徒達がどのように位置づけているかをみるために生徒が「好き」とマークした数を集計してみた。

表2から体育の学習が生徒達の好きな教科であるということが一般的にいえる。そのことは前年度の調査においてみられたと同様，この年代が身体活動に対して，少なからざる意欲をもっているということの表われとみてよいであろう。又調査2を各個人別に集計した結果にみても，同様である。

表3　一対比較による体育の好き嫌い

好きとマークした数	8	7	6	5	4	3	2	1	0	計
人　員	13	2	4	5	4	5	7	3	3	46

この表からわかるように9教科の比較において体育がどの教科よりも好きであるとした生徒が約⅓弱もあることは前にみられた結果と一致する。しかしここで問題になるのは，そうした全体的傾向からはみだす少数の生徒がいることである。体育がどの教科よりも嫌いとする生徒，体育と他の8教科との比較において体育に一つもマークのできなかった生徒のいることである。そこでそれらの数名を身体活動の嫌いなものとして一応チェックした。

(3) 課題を与えての作文

一学期に，主教材として取りあげたバレーボール，二学期なかばにバスケットボールやハンドボールの導入教材として取りあげたドッジボールの2つについて作文を書かせてみた。その中にはバレーボールやドッジボールをすることの喜び，楽しみを書くものと，逆にバレーボールやドッジボールをするときの悩み，嫌悪を書くものとが現われた。後者の中で一応原因のはっきりしたもの，例えば教材の性格，学習時の人間関係，指導法等に原因があり身体活動そのものに対する嫌悪でないとみられるものを別にして，身体活動そのものに対して悩みを抱いていると思われるもの数名をチェックした。

2. 研究対象の決定

以上あげたような3つの抽出作業の結果，どの場合にもチェックされた3名の生徒を研究対象として決定し，今後これらの3名の生徒に対して継続的に診断治療を試みることにした。

3. 研究対象となった3名の女生徒

(1) 教師の観察

研究対象となった3名は非常によく似た学習態度であった。

新学期この生徒達を担当し，まずバレーボールの学習に入ったが，いくつかのグループに分れての基礎練習，円陣パス等の学習時には余り目立たなかったのであるが，チームを編成してゲーム練習に入ると次第に目立つようになってきた。チームを作り，お互い同志でポジションを決めさせてみたが，3人ともみんなの話し合いの中に入り込むことができず，発言もなしに，リーダー格のもののいいなりに後衛のサイドへ同じようにつくことになった。この中学2年の女子生徒達にとって後衛というポジションは一般的にいって意欲のあるものにとっては余り希望しないポジションであり，意欲の無いものにとってはあたり前のポジションであった。というのはこの年齢の筋力，技能等から考えてもわかるように，パスやサーヴが余り遠くへとばないために，いきおいボールは前，中衛に集中しがちで，前，中衛にいた方がボールにふれる回数が多く，そのため技能の程度の高い得点能力のある，意欲のある生徒は前，中衛になることを希望する。一方能力の低い，得点能力の無いというより失点の多い生徒はどうしてもボールの余りいかない後衛にまわされることになる。又そういう意欲のない生徒はそうした余りボールの来ない場所，ボールにふれる機会の少い場所を逃避の場所として自他共に認めるような結果になっている。そのことについては1学期の終りに，「自分のやりたいポジション」という調査をした時にも上にのべたような結果を裏付けるものが出たのであるが，この3人の生徒達は同じように現在のポジションでよいと後衛のサイドに満足している。さてこの3名のゲーム中の態度は，ゲーム

に対して非常に無関心で，チームワークに対しても消極的で，ゲーム中もボールへの関心はほとんど無く，ボールの位置に応じて動くなどという動きは全然みられなかった。そればかりか，隣のものに話しかけたり，よそ見をしたり，自分のところへたまたまとんでくるボールの処理にもほとんど失敗するというような有様であった。このことは生徒達に書かせた作文の中にもこれら3名の生徒達の名をあげて，「チームに協力しない」「ゲームをしてもおもしろくない」と他の生徒達からきめつけられていることによってもはっきりと現われている。このことは他の教材の学習，例えばソフトボールやドッジボールをあつかった場合も同様で，チーム内における関心の程度，ポジションの決定等においてもバレーボールにおけると同様の状態がみられた。

(2) 調　査

身体活動の好き，嫌い調査については，3人とも「嫌い」と記入。また教科の比較においては3人とも体育にマークをつけたのは一つもなく，どの教科よりも体育が嫌いであると考察される状態であった。

(3) 作　文

研究対象となった生徒達の体育に対する考え方を表わすものとして作文がある。次に3人の生徒達の書いたものをあげてみよう。

A子　「バレーボールの悩み」

私は体育が嫌いなので，バレーボールをするのはいやです。輪になってパスをするのは割合に楽しいのですが，ネットを張ってゲームをするようになると，サーヴは全然できないし，ポジションが後ろなので，ボールがあまり来ないので，ついポカンと見ているだけになってしまいます。といって前の方へ行ってするのもいやです。サーヴの順番が自分のとろへ廻ってくると，いつも断るのですが，やらされてしまいます。それで体育の時間がよけいにいやになってしまいます。小学校のとき上級生の人達がバレーボールをしているのをみて，とてもうらやましかったのですが，実際に自分がやってみては少しも楽しくありません。はじめのパスの練習などのときは少しはおもしろかったのですが，いまではゲーム中いつも怒っているような顔でつっ立っていて，みんなに悪いとは思いますが，やっぱり嫌いなものは好きになれません。

「ドッジボール」

私はドッジボールは嫌いです。みんなのしているのを見ているのは楽しいのですが，自分がやろうとするとうまくできません。あまりみんながうまいので見ているととてもおもしろいので，つい見るほうになってしまいます。今度からは自分もみんなと一諸になって一生懸命やろうと思いますが，でもドッジボールは嫌いです。

B子「バレーボールの悩み」

私はバレーボールは大嫌いです。バレーボールだけでなく，体育というものがだいたい大嫌いです。何故かといわれても別にはっきりした理由はない。よく母から「運動神経が鈍いからお前は不器用なんだ」といわれます。そういわれると自分でもそうかも知れないと思います。そう思うというよりもそうきめてしまったのかもしれない。だからバレーボールをしても自分はへただという考えが頭にこびりついて，他の人に対してひけ目を感じ，隅の方へひき下ってしまう。何故自分もボールに体当りして進んでやれないかと考えて，決心してボールに体当りしようと思っても，周囲の人達がなんだか自分をみているような気がして何だか恥かしくなってひっこんでしまう。だからボールが自分の方へこなければいいが，うちそこなわねばいいが，みんなのためにボールを落さなければいいがと，心を小さくしていなければならない。だから自然と体育の時間はおもしろくなく，よそ見をしたり，ぼんやりして過してしまう。（中略）もっと恥かしがらずに，はきはきと自信をもってつきすすめばよいのだと考えたが，しかしいざ実行するとなるとついまごついてしまって機会をみすみす逃してしまう。まさに「云うはやすく，行うはかたし」である。だからこれから極端に実行しないで，少しずつ実行していかなければならないと思う。

「ドッジボール」

私は「ドッジボール」と聞いただけでも大嫌いだ。別に体育の中でドッジボールだけが嫌いなわけではない。前にも書いたように，他の体育だってあまり好きではない（中略）ドッジボールなんて，かんたんなものにみえても，私にはこれをうまくこなすことができない。だからたださえ嫌いな体育なのにドッジボールと聞かされると，とたんにやる気がなくなって，ただ形式的にコートの中に入ってボールに追いかけられて，あっちへだらだら，こっちへだらだらと逃げ廻るだけだ。ボールをたとえ受けたとしても，そのボールを投げかえすだけの勇気はない。そんな自分がみなから

見られているような気持で，楽しみもなにもない。ただ1時間が終るのを待つばかりだ。そして1時間の終業ベルが鳴るとホッとする。私がクラスで一番うまくなれればそれにこしたことはないが，そんなにうまくなれなくても，せめて進んでボールが受けられて，それを投げかえす勇気がもう少しほしいと思う。

C子「バレーボールの悩み」

晴れわたった青空に，ポーンと軽くはずむサーヴ，一勢に緊張してすばやくレシーヴのかまえ，何もかも忘れて一心にゲームにうちこむみなの輝やかしい顔，「ゲームセット」審判の声，みんなすばやく整列し，今のゲームの感想，作戦，よかった点，悪かった点と先生を囲んで互に反省しあう。時間が終る。なごやかな雑談のうちに更衣，みなりを整えて次の課業へ……とこんな空想をしてみる。こんな体育の時間だったら何とすばらしいことだろう。「私でもいっしょうけんめいやれば必ずできる」ということを夢にえがきながら練習するのがよいのだろう。しかし，みなにはできるだろうが，運動神経のにぶい私にはとうてい不可能なことである。体育の時間に何をやっても一番びりの私には体育が学課の中で一番にがてだ。だから真の体育のおもしろさというものを私は知らない。

「ドッジボール」

私はドッジボールがあまり好きでない。相手にボールをぶっけられぬように前へ後へ逃げ廻る。相手が余り強いボールを出す時なんか，まるでアリが大きな人間に踏みつぶされるような気持になる。そしてとうとうボールを当てられると，痛かったという感じよりも，もう外野へ出ればボールにあてられる心配がないと安心する。しかし外野へ行くとボールはなかなかこないので，ぼさっと立っていなければならない。みなのやっているのを見ていると，強いボールを投げる人や内野にいる人だけの運動のようで余り好きではない。

4. 診　断

前記のようにこの研究が昨年の継続研究でありながら研究実施者が代り，研究対象を新たに抽出しなおした関係で診断，治療の詳しいデータは発表できないが今までのべてきた事例によって研究対象として抽出された生徒達の意欲欠如の状態は明らかであろうと思われる。3人に共通した問題はいずれも技術のへたなこと，技能の低いことに対する異常なコンプレックスが見られ，それがA子の場合は他人へのひけ目，えんりょとなって現われ，B子やC子の場合は，それゆえに折角やりたい，やろうという意欲ができてきてもキッカケが無くて入りこめないでいる状態である。しかし意欲欠如の原因はこうした表面にあらわれたものではないかも知れない。昨年この研究でのべたように，個人票の作成，面接等によって原因の究明，治療へと追跡的に研究を進めてゆきたいと考える。

V　今後の見通し

今後この研究を進めても，果して私達が意図しているように，これらの生徒が身体活動に対して意欲をもつようになり，体育が好きになってくれるかどうかは予想のかぎりでないが，いずれにしてもこの研究を継続し，資料を累積していくことによって，それが今後の生徒達の指導に，少しでも役に立てば幸いであると考える。

この研究を進めるに当っては教育学部の重松教授，水原助教授，石黒助教授，丸井講師，ならびに教養部の川村教授の御熱心な御指導と御助言をいただきました。